第9回企画展

盛岡市遺跡の学び館

もりおかで焼かれた"やきもの"

―セトモノから煉瓦まで―

■目次

目　次

■もりおかとやきもの文化　5
・盛岡とやきものの歴史　8
・岩手県内のやきもの　9
・川原毛瓦窯跡の調査
■城下で焼かれたやきもの　10
・寺町窯―盛岡城遠曲輪跡の調査―
・山蔭焼　15
・花古（鼻子）焼　21
・北山焼　24
■明治期以降の窯業生産　26
・勧業場焼　28
・岩手焼　31
・勧業場と盛岡周辺の近代窯業　36
■文献史料　43
■盛岡周辺の窯業史関係年表　47
■主要参考文献
□コラム「城下図に描かれた窯場のけむり」　14
「天満宮所蔵の山蔭焼商売之図絵馬」　20
「若狭屋文書と花巻焼」　25
「盛岡城の土塁」　35

■もりおかとやきもの文化

□盛岡とやきものの歴史

日本における「やきもの」の歴史は古く、そのはじまりは約一万五千年前の縄文時代草創期の土器まで辿ることができます。東北地方は、特に縄文期の遺跡が多く、盛岡周辺でも中期には「繋遺跡出土深鉢形土器（国指定重要文化財）」に代表される流麗な曲線で大胆な渦巻文を特徴とし、縄文人の生命力を感じさせるモチーフを持った土器が出現し、世界の原始美術の中でも最高の傑作とされています。縄文期以降、野焼きなど酸化炎焼成を主体とした弥生土器や平安時代の土師器の時代を経て、古墳時代には朝鮮半島から高温度で焼成できる窯を使用した還元炎焼成の須恵器の技術が伝わり、十二世紀以降にいたっては、六古窯で代表される常滑・瀬戸・丹波・越前・信楽・備前を中心とした中世陶器の時代を向かえることとなります。

縄文時代草創期の爪形文土器
（盛岡市大新町遺跡出土）

縄文時代中期の深鉢形土器
（重文・盛岡市繋Ⅴ遺跡出土）

磁器の生産については陶器より遅れ、江戸期に入った十七世紀初頭、肥前有田において李参平により元和二年（一六一六）に創始されたものとされ、当時は東インド会社を通じて広く海外にまで輸出されると共に、国内でも販路拡大を図り、瀬戸・美濃の各窯にも影響を与え、技術的にも十八世紀末までは、肥前鍋島藩の独占市場であったとされています。

江戸期以降、現在の岩手県内となる旧盛岡藩領と旧仙台藩領に跨る地域の窯業は、文献上では陶磁器より先に、藩で調達した御用瓦の生産に関わる記述が多く、盛岡城も築城当時の慶長期から瓦を使用し、当初は燻瓦（黒瓦）で葺かれていました。しかし黒瓦は低温焼成で、積雪凍結に脆く、頻繁な補修が必要となり、東北各藩の共通の悩みとされていました。正保四年（一六四七）、会津藩主保科正之は城改築を契機に、かねがね冬期間に凍み割れする瓦の改良を思い立ち、岩瀬郡長沼村で作陶に従事していた尾張瀬戸出身の陶工水野源左衛門らに命じ、施釉の堅牢な赤瓦を作らせ、上納させています。また水野家は瓦のほか、茶人である藩主正之の趣味に応える茶陶も手がけた家柄であったと言われています。

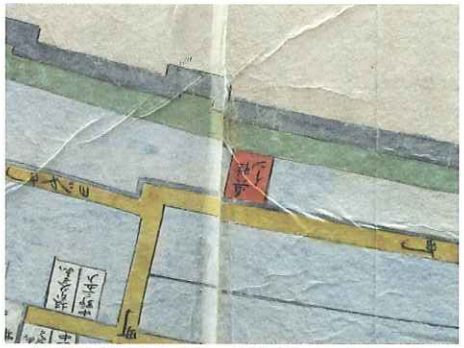
盛岡藩領内の記録では「御本丸御二階屋根瀬戸瓦被仰付事

■城下で焼かれたやきもの

□寺町窯（てらまちよう）―盛岡城遠曲輪跡の調査―

現盛岡市本町通二丁目所在

寺町窯は宝永年間から明治初年頃まで操業された御用瓦窯で、花屋丁惣門西隣にある白光山真性寺の南隣にあったという伝承のみが残されており、実際の場所は不明でした。江戸期の城下図で花屋丁付近を確認してみても、「真性院（寺）」は描かれているものの、「瓦焼場」などの窯場を示す表記は見当たりませんでした。



「寛延盛岡城下図」部分　寛延年間　盛岡市中央公民館

平成十八年、「花屋丁惣門北西隅」に当たる宗教法人光照寺の敷地内で、本堂および庫裏の改築工事に伴う事前の緊急発掘調査として「盛岡城遠曲輪跡」の第十四次調査が行われました。

調査期間は平成十八年十一月一日～十二月十五日で、面積二一一四平方㍍の範囲で実施されました。

発見された遺構は、盛岡城の外堀跡一条のほか、粘土採掘坑五基が見つかり、また堀の埋土の中から盛岡藩の定紋である双鶴文を施した燻瓦・赤瓦、無釉で素焼の製品、窯道具と溶着した製品、焼台・ハマなどの窯道具などの遺物が多数出土しました。

外堀跡は片方の肩のみを確認し、調査区内での幅は六～七㍍で、調査区に沿ってL字に曲がる道路幅を含めると約一一～一二㍍になると考えられます。底面は確認できませんでしたが、深さは三㍍以上になるものと考えられます。埋土はⅠ～Ⅳ層に大別され、窯に関する遺物はⅡ～Ⅲ層から多く出土しています。このⅡ～Ⅲ層は明治以降、土塁を壊した際に堀に投げ込まれた土と考えられ、窯本体は土塁に構築されていた可能性もあり、また粘土採掘坑は外堀の法面や肩を壊して掘り込まれていました。

現在の本町通りから名須川町付近からは「名須川土」として江戸時代から粘土が採掘された場所でもあり、沖積層中の青灰色粘土層は幅八尺乃至十尺（二・四～三・〇㍍）に及ぶと記録にも残されており、その範囲は寺町惣門近くまで及ぶものと思われます。

出土した遺物は磁器では、碗・皿類、陶器では、碗・皿・鉢・擂鉢・猪口・植木鉢・火入・甕・壺・徳利・土瓶など、瓦では燻瓦・赤瓦の双鶴文の軒丸瓦、軒平瓦など、窯道具では、トチン・ハマ・桔梗台・脚付焼台・籾団子などが確認されています。

調査状況（北西から）

盛岡城に供給されたと考えられる瓦は、軒丸瓦では粒羽双鶴文・骨羽双鶴文・角羽双鶴文など十八世紀中頃から十九世紀の中頃にかけての製品です。定紋の施された瓦は、藩の許しを得なければ製作することは不可能であり、紫波の川原毛瓦窯閉鎖後に城下で操業された御用瓦窯が寺町付近にあったことを示しています。

また、今次調査で外堀から出土した一括遺物については伝承どおり寺町窯が存在した地域からの出土であり、また瓦生産だけでなく鉄釉や灰釉を始めとする碗・鉢及び甕類の陶器も窯道具と溶着して共伴していることなどから、日常雑器の生産も手掛けていたことが判明しました。

検出された瓦類

しかし、未だ窯跡本体の発見には至らず、また調査区の西に隣接して明治から昭和二十年代まで、民間の瓦・煉瓦工場が存在し、明治初期には雑器も焼いたという言い伝えもあることや、遺物の中に明治期の勧業場焼の染付磁器も混在していることなどから、出土遺物のすべてが操業当時からの所産であるとは考え難く、

土塁に構築されていた窯が、崩壊（破壊）した際に生じた排土とともに周辺域の工房や住家から投げ込まれた二次的な遺物も含まれているものと考えられます。

また、他の藩瓦窯（東中野・仙北町）は「瓦焼御用地」として絵図に描かれていますが、寺町窯だけは藩窯にも係らず、古文書や絵図等にその位置が一切記されていません。

今後、藩窯に関する史料調査が進み、新たな記述や描写が発見されれば、その謎が解けるかもしれません。

寺町窯出土　飴釉茶碗

寺町窯出土　灰釉碗

寺町窯出土　磁器　染付茶碗

寺町窯出土　磁器　染付茶碗

寺町窯出土　楽焼　盤

寺町窯出土　化学釉薬を使用した明治期の勧業場焼

寺町窯出土　陶磁器　各種

寺町窯出土　双鶴文軒丸瓦

寺町窯出土　軒平瓦

寺町窯出土　軒桟瓦ほか

窯道具：桔梗台・ハマ・脚付焼台

寺町窯出土　鉄釉甕

寺町窯出土　擂鉢

擂鉢片と籾団子

窯道具：トチン

窯道具は、匣・トチン・ハマ・桔梗台・脚付焼台などが陶器の製品と溶着して出土しているが，磁器との組み合わせは認められていない。

12・13頁　当館

コラム

城下図に描かれた窯場のけむり

盛岡藩士の川井鶴亭が鳥瞰図法により描いた版画で、広角的かつ立体的に表現された城下図である。幕末に確立した新しい絵画技法で、画面上部の左右に巌鷲山（岩手山）・玉東山（姫神山）を配し、北上川・雫石川・中津川の合流点に市街地が形成されている様子が窺われ、手前の北上川に架かる舟橋、中津川の上・中・下の三橋及び河南（中津川左岸）地区では杉並木と並行する遠曲輪堀割や小河川なども克明に表現されている。また中央には三階櫓をもつ盛岡城や重臣屋敷、周辺には門をもつ侍屋敷と軒を並べる町家が色や建物構造の表現を区別して描かれ、北山・寺ノ下・八幡宮の社寺群では参詣の人々も描かれ、城下の賑わいまで表現されている。鶴亭の没年は安政六年（一八五九）とされ、それ以前の城下の様子が描かれているが、画面中央の寺町惣門周辺と舟橋の南東の北上川河畔、不退寺（現在の不退院）周辺の二カ所の建物から煙が立ち昇っている様子が描かれ、当時登り窯による操業が行われていたことが推定される。安政の頃の作品とすれば、既に八幡宮に南隣する御用窯の山蔭焼は廃窯となっており、弘化三年からの新庄花古（鼻子）窯に移転している時期であるが、残念ながら画面には新庄地区は描かれていない。

盛岡城下鳥瞰図（川井鶴亭　江戸末期）盛岡市中央公民館

寺町周辺から立ち昇る煙

舟橋の南東から立ち昇る煙

瓦焼御用地（城下及近在図：慶應年間）

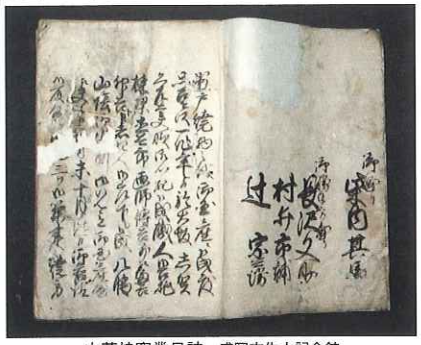
□山蔭焼（やまかげやき）

現盛岡市茶畑一丁目所在

山蔭焼は、城下八幡宮に南隣する山蔭（現茶畑一丁目）に築かれた窯で、天保六年（一八三五）十月、盛岡藩営として国産御用にあてるため開窯されました。山蔭焼については当時の豪商鍵屋（村井家）の記録『山蔭焼窯業日誌』が残っており、業務の内容を窺い知ることができます（原文は文献史料六・七参照）。

原文を要約しますと、

絵図面に見える山蔭の地名（城下及近在図：部分）盛岡市中央公民館



山蔭焼窯業日誌　盛岡市先人記念館

盛岡八幡山蔭瀬戸物焼

覚

天保六年十月、肥前国唐津より瀬戸物師三人当夏に下し成され候につき、八幡山蔭道除太田小重（十）郎菜園を用地に仰せ付け焼物釜及び打細工所長屋共に御建なされ、…中略…瀬戸焼物之儀御国産になされたき恩召をもって一昨年より大坂志賀覚太夫様御心配なされ職人御召抱え棟梁直太郎、画師伝吉外に多吉、夘吉と申者四人御差下しなされ、八幡山蔭御場所御見立御国産懸に夫々仰付けられ、未十月頃よりご普請御取懸り竈三つ御築建焼方仰せつけおかれ候。しかるところ、このたび瀬戸焼方売捌共、諸事辻宗兵衛へ仰せ付けられ候間、諸事加談いたし候て御国産に相成候よう仕るべき旨村井京助（村井市輔＝鍵屋茂兵衛）へ仰せつけらる。

日誌によれば、天保六年（一八三五）十月、肥前国唐津（現佐賀県有田周辺）から棟梁直太郎と絵付師伝吉・多吉・夘吉の四人を召し抱え、窯三基のほか、細工所や長屋を築き、国産（藩窯）として　操業を開始。さらに翌天保七年五月には家族を呼寄せ、職人は二十余名にも達したといいます。磁器生産に必要なカオリンを含む陶土は主に現在の花巻市湯本饅頭山、同湯口地内の円満寺および鍋倉山・松倉山で採掘したとされています。

ところで日誌に名を連ねている人のうち、村井市輔（鍵屋茂兵衛）は湖西の高島出身、売捌方として名が記されている辻惣兵衛は湖東の日野出身の近江商人ですが、不来方の地に盛岡城築城を進言した蒲生氏郷の故郷も日野であり、岐阜で織田信長の産業振興を目の当たりにした氏郷は生まれ育った日野で産業振興策を展開。やがて全国に雄飛する日野商人を育てることになります。

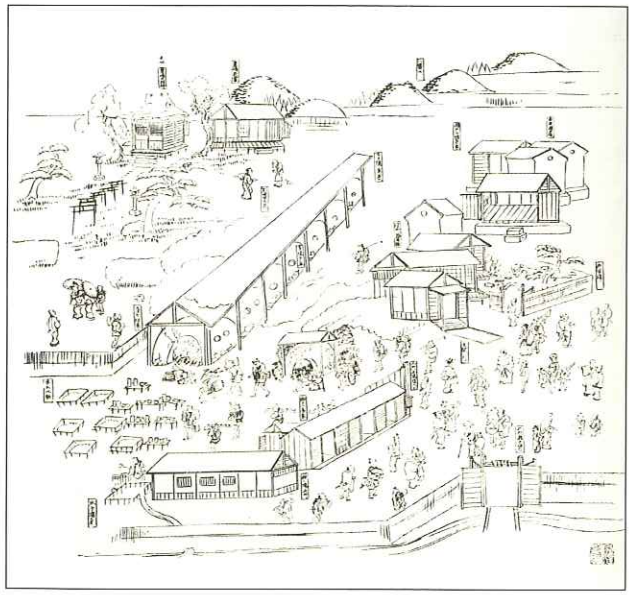
また盛岡藩三代藩主南部重直の実母源秀院が蒲生氏郷の妹でもあることから、蒲生氏と南部氏、そして近江商人と盛岡の繋がりも深かったものと考えられます。

辻惣兵衛家は特効薬「神農感応丸」の製造元で有名であった正野玄三家と同じ日野を代表する豪商で、盛岡では「日野屋惣兵衛」として、大店を構えていました。

辻惣兵衛とやきものとの関わりは山蔭焼廃窯後も続き、大坂で陶磁器販売を手掛け、明治期以降は瀬戸・美濃を拠点に国内向けや海外向けの製造販売も行い、酒器セットや「辻惣」の銘や菊水マークのポット・ミルク入れ・カップ&ソーサー」などの洋食器も手掛けています。

山蔭焼の製品は日用雑器を中心とした染付磁器が主で、すず徳利・銚子・杓立・角皿・向付・手焙・花器などが伝わっており、窯跡から表面採集できる陶片には型押しの菊形皿・丼・鉢・砂鉢・湯呑茶碗・瓶類・杯類・土瓶・灰吹き・片口・盆栽鉢・手水鉢そして擂鉢・灯心皿・甕類の陶器にまで及んでいます。

これらの製品は藩の御用物で、特に城中使用の器物もあり、「御膳所」「北地所」「山蔭造」など窯名や城中の所属を示すと思われる染付銘を持つものもあります。絵文様は染付で、山水・花卉・鳥獣魚など多種にわたりますが、器形・文様共



山蔭焼窯場之図（部分　写）盛岡市中央公民館

に伊万里の系統であることは当然で、地元として竹虎・南部奔馬・宝珠などを施した手焙などは山蔭焼の特徴的なものといわれています。

また地元の絵師も絵付けに加わり、二代目喜多川歌麿に師事したという盛岡藩士田口森蔭・長嶺清麿も図柄を描いています。森蔭は藩の物産方で俳諧・歌にも堪能で玉屑散人と号し、狂歌名を雪廼屋といい、盛岡天満宮には森蔭が描いた珍しい生業絵馬「山蔭焼商売之図絵馬」（天保七年　紺屋町　渋谷栄之助）が奉納されています。

この山蔭焼は、天保七年も押し迫った十二月二十九日、突然藩の一方的な方針で閉鎖され、陶工たちに暇を与える事になってしまいますが、その理由は天保の飢饉の凶作であったとされ、その操業期間はわずかに二カ年足らずの短期間でした。藩の記録には、

覚

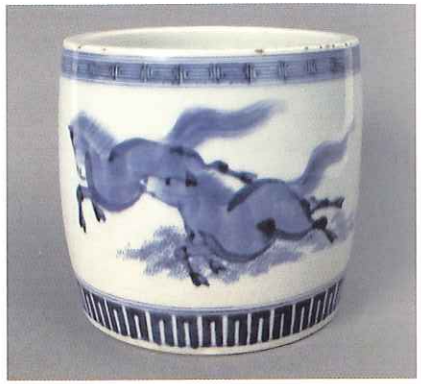
一．　瀬戸方　　諸職人

遠路雇下し陶器焼立候処　何れも出精働候而

既ニ盛山ニ可至処　当凶作ニ付差支えの筋有之　休止申付候条依暇差遣之

十二月

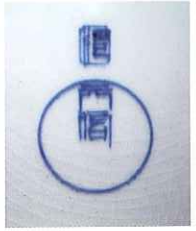
家族まで呼び寄せた陶工たちのその後の動向については断片的ですが、新庄東山焼（山形県新庄市）の記録に残っており、山蔭焼棟梁直太郎は秋田寺内焼の瀬戸師として再び名を



裏面

右上 山蔭焼　染付走馬図手焙　　個人
天保6・7年（1835～36）
口径16.0×最大径16.9×底径15.2×器高15.1

左上 山蔭焼　染付雉子牡丹図手焙　個人
天保6・7年（1835～36）
口径15.0×最大径18.4×底径16.0×器高14.5



裏面

見ることができます（『新庄東山焼資料』）。

東山焼の創始者湧井弥兵衛の「履歴書」によれば、

「天保十年中、寺内村瀬戸ニ於テ肥前国松津郡在（有カ）田村産瀬戸師直太郎ニ就キ唐津流丸窯ノ法ヲ皆伝セリ…中略…奥州森岡ニ於テ石焼ノ国産ヲ開カレ、九州肥前唐津ヨリ数多ノ職人…中略…多分ハ秋田エ参リ、同寺内ノ国産ニテ石焼ヲ開カント欲シ…」

と記され、また寺内の西来院の過去帳にも「天保八年十二月九日肥前国人也瀬戸山住ス 本田直太郎子供」とあることから、棟梁直太郎以下複数の肥前出身の陶工たちは数人が盛岡に残留するも、大方の陶工たちは山蔭焼窯場からすぐさま秋田の寺内焼窯場へ移動し、まだ開始されていなかった磁器生産の創始に貢献した事が推察されます。

寺内焼窯跡は秋田市寺内堂ノ沢二丁目地内に所在。市街地から北西部、古代城柵「秋田城跡」と同じ高清水丘陵の斜面に立地しています。小学校建設に伴う緊急発掘調査が平成元・二年に実施され、階段状連房式登り窯の陶器窯・瓦窯・煉瓦窯など六基の窯跡と大量の染付磁器・陶器・瓦・窯道具類の遺物が検出されました。

また、棟梁直太郎と一緒に肥前から招聘された絵付師伝吉・多吉・外吉の四人のうち外吉（宇吉）の名は弘前の悪戸焼の窯場に見ることが出来ます。悪戸焼は弘前城から南西へ約四キロメートルの岩木川沿いの悪戸・下湯口地区で生産されていた焼き物の総称で、窯跡は扇田・野際・青柳の三カ所が知られ、磁器は「白焼」、陶器や土師質・瓦質土器は「雑器」などと呼ばれていました。

弘前大学の調査によれば、天保十一年（一八四〇）、盛岡山蔭焼に従事していた瀬戸師宇吉の指導により、悪戸村瀬戸座において白焼（磁器）の焼成に成功したとあり（『邦内事実秘苑』）、野際窯からは良品ではないものの、磁器の碗皿類が確認されています。

山蔭焼
染付牡丹蝶朝顔図角皿
天保6・7年（1835～36）
幅24.4角×器高4.7
染付銘　底部高台内「庸」
個人

同　裏面

山蔭焼　染付　皿類

山蔭焼　染付 型押し 角皿
左：幅7.4角×器高1.9　右：幅8.6角×器高2.6　個人

山蔭焼　染付　鉢・井・土瓶蓋ほか

山蔭焼　染付　碗類

山蔭焼　窯道具　タコハマ

山蔭焼　染付茶碗類　草花文

山蔭焼　窯道具　ハマ

山蔭焼　窯道具　トチン

上段右以外　当館